西端に位置する牧場）

Business 仕事の窓 Report

その3

# 順調に伸びる沖縄の肉用牛

農林水産部

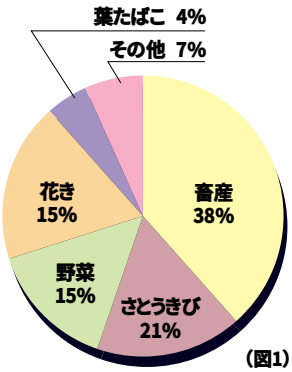
沖縄の畜産は、本土復帰以来順調な発展を遂げ、沖縄農業の中で重要な地位を占めています。中でも肉用牛は年々順調な伸びをみせ、今後とも沖縄農業を支える重要な部門として発展していくことが期待されています。

## 一、沖縄農業における畜産の位置

平成十年における沖縄の畜産の生産額は三百五十八億円で、農業粗生産額全体（九百四十四億円）の三十八％を占めており、沖縄農業の中で重要な地位を占めています。（図1）

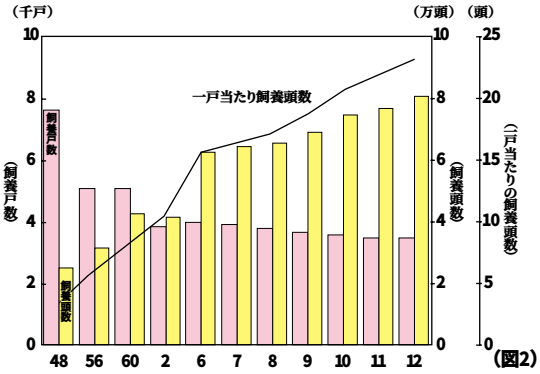
その中で、特に肉用牛の生産の伸びにはめざましいものがあり、平成十二年の飼養頭数は、第三次沖縄振興開発計画（平成四～十三年度）の目標値である八万頭を既に突破しており、今後も大きく伸びるものと期待されています。（図2）

農業粗生産額の主な種目別の割合（平成10年）




（図1）

肉用牛の飼養戸数と頭数の推移




（図2）

## 二、全国における沖縄の肉用牛の位置

平成十二年の沖縄の肉用牛の飼養頭数は八万七百頭で、全国十位の飼養頭数となっています。そのうち、子取り用めす牛については四万六千四百頭で、全国の七・三％を占め、全国五位に位置付けされるなど素牛の重要な生産供給地域となっています。（表1）

全国からみた沖縄の肉用牛の位置（平成12年）　単位:戸,頭　（表1）

| | 飼養戸数 | 飼養頭数 | 子取り用めす牛 |
|---|---|---|---|
| 全国（A） | 116,500 | 2,823,000 | 635,500 |
| 沖縄（B） | 3,470 | 80,700 | 46,400 |
| B／A（%） | 3.0 | 2.9 | 7.3 |
| 全国順位 | 10位 | 10位 | 5位 |

肉用牛の飼養戸数・頭数（沖縄）　単位:戸,頭　（表2）

| | 飼養戸数 | 飼養頭数 | 一戸当たり |
|---|---|---|---|
| 昭和48年（A） | 7,620 | 25,200 | 3.3 |
| 平成12年（B） | 3,470 | 80,700 | 23.3 |
| B／A（%） | 45.5 | 320.2 | 706.1 |

## 三、沖縄における飼養状況

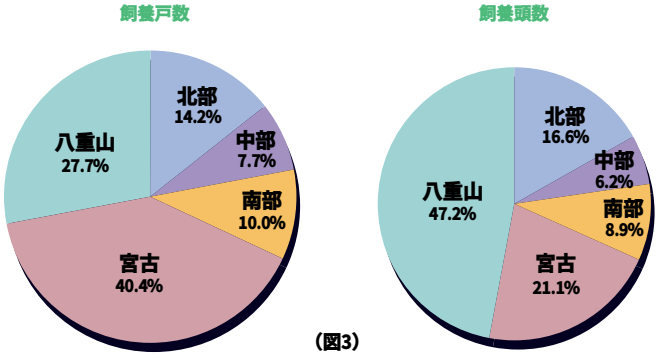
①概　況

平成十二年の肉用牛の飼養戸数及び頭数を復帰直後の昭和四十八年と比較すると、飼養戸数は小規模飼養階層の脱落等で半減し、三千四百七十戸となったものの、飼養頭数は八万七百頭と三・二倍に増加しており、一戸当たり飼養頭数は七倍と規模拡大が進んでいます。（表2）

②地域別の飼養状況

肉用牛の飼養農家戸数は、複合経営による舎飼形態が主体の宮古地域が四十・四％と最も多く、次いで八重山地域が二十七・七％となっており、これらの地域で全体の約七割を占めています。一方、飼養頭数は、放牧形

肉用牛の地域別飼養戸数及び飼養頭数の割合（平成11年）




（図3）

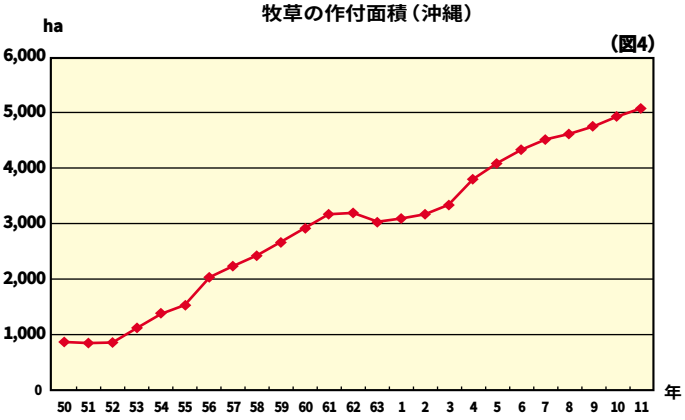
与那国東崎（我が国の最西

態が主体の八重山地域が四十七・二％と県内飼養頭数のほぼ半数を占めており、次いで宮古地域が二十一・一％、北部地域が十六・六％、南部地域が八・九％、中部地域が六・二％となっています。（図3）

## 四、発展に向けての努力

### ①飼料基盤の整備

沖縄は、亜熱帯という温暖な気候から、牧草の生産性が本土の三倍と高く、肉用牛の生産に有利な条件を有しています。この地域特性を生かして復帰以降、畜産基地建設事業等の公共事業を中心に草地造成が行われたことから、昭和四十八年には九百九十九ヘクタールであった牧草の作付面積は、平成十一年には約五千ヘクタールと五倍に拡大しました。（図4）




### ②肉用牛の改良

沖縄の肉用牛は第二次世界大戦で壊滅的な打撃を受け、戦後、外国牛の輸入により牛の増頭を図ってきました。復帰後は、沖縄県が黒毛和種を肉用牛の奨励品種に定め、毎年他県から優良種牛を導入してきたほか、肉用牛の計画交配事業を実施し、品種改良に努めてきました。

### ③貯蔵飼料の普及定着と飼料生産支援組織の出現

復帰直後までは、牛の飼料給与は青草給与が中心となっていましたが、昭和五十年代から、畜産基地建設事業で乾草やサイレージ等の貯蔵飼料の生産施設機械が導入されたことから、飼養規模が拡大されてきました。最近ではコントラクター方式（飼料生産の外部委託方式）により、高齢者や女性でも多頭飼育がやりやすくなっています。

ロールベールラップサイレージ（白い円柱状のもの）

### ④価格の安定

価格が不安定だと、高値のときは増頭し、暴落すると飼養を中止（又は規模縮小）することの繰り返しでした。現在は、子牛取引価格が保証基準価格以下に低落した場合には補てんするという価格安定制度の実施により、農家は安心して肉用牛の生産に励むことができます。

### ⑤オウシマダニの撲滅

八重山地域では、これまで、バベシア病という牛の病気を媒介するオウシマダニが生息していたため、同地域からの牛の移動が制限されてきました。そのため、昭和四十六年から国の補助も受け、関係者が一丸となって駆除に取り組んだ結果、平成十年にダニの撲滅がなされました。撲滅により、移動制限が解除され、八重山地域の農家の肉用子牛の生産意欲が高まっています。

沖縄の肉用牛の増頭要因はいろいろありますが、何よりも農家の飼養管理技術、飼料生産技術、経営管理技術の向上があったからです。県・市町村・関係団体等が農家と一体となって、たゆまぬ努力を積み重ねてきた結果がこのような肉用牛の飛躍的な発展につながったものであると確信しており、今後ともこのような取り組みを期待するものです。